

鯨研通信

第75号
1957年12月

東京都中央区月島

西河岸通十二の四

財団法人 鯨類研究所

電話 深川 (64) 0296

0297
0298
振替東京五零六八八



最近の日本近海鯨漁場の特徴

宇 田 道 隆

前 が き

昭和三十一年の夏と同三十三年の夏及び秋に歴訪した東北海区と北海道の事業場等で鯨況、海況の開取調査を行った。その記録を概括して今後の研究資料、問題提起の一端にもと考えて本通信にかゝける。

大洋、日本、極洋、近海、日東等各社の方々の御教示に深謝すると共に何か誤記に気づかれた向きに御訂補をお願いします。

一、オホーツク海漁場

(1) 昭和三十一年度、当海区の捕鯨は例年の漁期、六月末—七月末、オホーツク大和堆方面を中心とする級別—網走沖の漁場に行われるのが、昭和三十一年度は二月以来流水が甚だ多く、いつもの年より半月—一カ月もおくれて、五月半ばによりやく流水がなくなつたこと、東樺太寒流の強勢に反し、宗谷暖流が弱勢だつたため、水温著しく低冷で、昇温も非常におくれ、漁況はなだ振わなかつた。オホーツク高気圧は八月下旬消滅、気温も低く、海霧多く、七月十五—十七ごろ

四、五日特に濃霧でちやうど盛漁期に太陽をみず、鯨も発見し難く、六、七、八月の陰曇は北見地方を中心とする北海道冷害の結果となつた。漁場水温は十一度—十六度で、最多獲水温は十二、十三、十四度にあり、前年(昭和三十年)は水温高く十八度位まで昇温した。同海区における三十一年の鯨は七月が主漁期となり、八月はごく少なかつた。

このような濃霧のとき鯨は霧のあるところに群集する性質があるというのは、おそらく寒流先端域に相当し、シオメが発達し、エサも豊富なためであろう。オホーツク海ではガス(霧)が多い年は水温低く、光量不足でプランクトンの発が生しい。雨が降つて少し照るとすぐ昇温する。

昭和三十年は高温で暖流強勢、豊作年であつたが、昭和三十一年は反対になつた。ナガス鯨のエサはスケソイヤ、アミであるがアミはこの年少く、スケソイヤも不漁であり、この来遊量はエサの量と相関をもつものようである。また、この年はエトビリカ(嘴の赤い海鳥)が余り見えなかつた。

オホーツク海では昭和二十九年サンマが大漁(四二〇万貫)で、以前よりサンマ、ニシン(沖刺網、底曳網)イカの漁獲量は増加し、ハタハタも太平洋側と同様ふえて来たが、アブラサメ(昭和二十二—二十四年大漁、同二十五、二十六年不漁となる)及びタラは激減した。イワシは昭和十一—十五年(同十二、十三年を中心)に豊漁だつたが以後漁がなくイカは昭和二十六、七年群来した。鯨漁とエサとの関係についてはなおよく調査の必要がある。

(2) 昭和三十一年度、オホーツク海捕鯨は前年よりも一層不漁で七月にナガス鯨をわずかに六頭とつたのみで、水温低く海霧が多かつた。このオホーツク海のナガス鯨の洄游系統はまだよくわかつていないが、春先日本海側でニシン終漁期に利尻方面に鯨をみるといい、朝鮮東岸長嶺沖あたりの鯨と北見沖の鯨がよく似ているというようなことが日本海系統とのつながりを示唆しているのではないだろうか。またオホーツク海のナガス鯨は、昭和二十二年から二十四年にかけて漁がはじまつて乱獲に過ぎ激減したともされている。

二、東北海区北部、道南沖漁場

(1) 昭和三十一年度、この年、春から寒流強いためか道南沖への鯨の北上はおおく、六月は釧路沖での捕獲があまりなく二陸沖が多く、八月末日までの各社の捕獲頭数は二一六頭(シロナガス鯨十二、ナガス鯨二四二、ザトウ鯨十二、イワシ鯨五六八、オガサワラ鯨二〇、マッコウ鯨一、二六二)でオガサワラ鯨は三十年度の九〇頭に比べ少くなつてゐることが注目される。

釧路厚岸沖では例年サンマの来遊とイワシ鯨の来遊は正相関がみられる。道南東の鯨漁場とサケ、マス漁場とはほぼ合致してゐる。八戸北東沖、津軽海峡東方漁場は八戸く襟裳沖間を中心に分布し、五、六月シロナガス鯨の捕獲があつたが、この年はマッコウ鯨の捕獲が多かつた。

シケ前はほとんどいづれもよい漁がある。八月十七、十八日シケで、その天候が崩れる前の八月十六日、マッコウ鯨四〇頭、イワシ鯨三頭の捕獲があり、九月九、十日台風の前にクジラ漁に最適のいわゆる「マッコウ日和」となり、九月八日マッコウ鯨二十一頭、イワシ鯨三頭、九日マッコウ鯨二〇頭、イワシ鯨五頭、ナガス鯨一頭の捕獲があつた。また鯨の性質として夜間、天候落ち目のとき、大潮時は接岸する。

(2) 昭和三十一年度、本年四、五月以降寒流強勢で六、七月になつてもひきつづき寒流強く衰退をみせず、特に東経一四六―一四七度附近に南下流が強く、本年より一―四度ぐらゐり低温を示した。このため寒流域にひろくガス(海霧)が多発し、九月一杯までつゞき、距岸約二四〇マイル沖まで分布し、このため鯨のケ(潮吹き)が見えなく、鯨発見を困難ならしめ、霧の晴間にやつと漁をする状態であつた。十月になつて霧が晴れナガス鯨、マッコウ鯨が大黒山島沖四〇―一八〇マイルにみられ、ナガス鯨はアミ、イカをくつていたという。

鯨の群そのものもいづれより小さく分散していたが、梅雨前線に沿つて小低気圧が次々と来襲し、風は風速十メートル程度のものがよく吹いた事も操業に多少の妨害となつた。

鯨は夏北海道沖から三陸沖にかけて広く分散し、潮境がひろがり、エサが少なくて群集しなかつたのがその原因と見られた。胃内容物はイワシ鯨はサンマ、イワシ、アミ等、マッコウ鯨は主にイカ、サンマ等であつたが、今夏は一般にサンマや小サバなど鯨のエサが少なかつた。従つて鳥も少く、潮境形成はあまり発達しなかつた。今年イワシ鯨は特に少く、またオガサワラ鯨は全体に少なかつた。(暖流の強い年には北海道沖では、イワシ鯨が多くみられるという。) ナガス鯨、シロナガス鯨(いつも五月初旬多い)は例年より少く、またマッコウ鯨も比較的少い上にマッコウ鯨がしだいに小形化して、以前ほどの大型マッコウ鯨は見当らず、小型マッコウ鯨群が最近多くなつてゐることは、資源がすでに満限に近いことを示すよう、案ぜられる。

セミ鯨が本年はよくみられ、特に五月北海道沖に多く、約五十頭程度の発見があつたという事である。大戦中北千島でセミ鯨を一日四―五頭もつた事から推察すると禁漁になつて以来またふえたものと思われ、最近色丹沖あたりでソ連がセミ鯨をとつてゐるらしいという声がある。ソ連による千島方面および北洋における捕鯨がどのような影響を日本近海捕鯨などに与えているか、検討すべきであつて鯨道をみだし、北海道沿岸から沖へ鯨を追い払うような効果を与えていないか調べる必要があろう。

漁場は去年もそうだが今年(昭和三十一年)特に沖合に遠く、日東が霧多布根拠で比較的沿岸でつたものを除いて一般に二百マイル以上の沖合が多かつたようである。年々漁場の遠隔化する趨勢は歴然たるもので、現在の船速(十三ノット内外)では二百数十マイル乃至三百マイル以沖では曳鯨中に鮮度が落ち、採算割れするといふ。鯨も近海の潮境のエサの多い、いわゆる「鯨のたまり場」にゆつくり長居ができていよいよキャッチャーのはげしい集中攻撃をうけつゝあり、次から次へ新しい鯨群の「たまり」場に向つて入りこんでくるのを沖にはりこんで捕獲するといつた現状になつてゐる。この波状の鯨群の接岸入り込みは夏季東北海区北部東経一四五―一五〇度、北緯三七―四三度あたり三つぐらゐの波状をなした等温線帯の頂部に近いところが注目されるとのことで、この南東からの波状と潮境、鯨道の関係

をよく調べてみる必要があると思う。

低気圧が通るとそのたびに潮境、暖流の入りこみがあり、これにつて鯨群が寄つてくる、いわゆるシケ前の好漁はこれによるものと考えられる。本年も八月十三日夕方シケ前に北海道各社十数頭を好漁している。

大潮のときも鯨群のよるといふのは向岸流が強くなるためであらうが、特に台風等大低気圧による向岸流が大潮時に強化されるためとみられ、この点沿岸急潮ともあわせて実測調査を必要とする。低気圧の通路も問題であつて、北海道の北側を通るときと南側を通るときに海況(等温線帯の南北移動等)に大差のあることをきき、非常に興味をおぼえた。紀州大島漁場ではシケ前や大潮どきでないときも鯨群の接岸がみられず、従つて漁がないという事実はきわめて顕著といわれている。

(3) 本年は北海道、千島、東北海区沿岸では寒流の南下が夏八、九月まで強かつたが、逆に沖合では暖流が岸をはなれて迂廻し、遠くアリューシャン方面からベーリング海の方への春夏季北上が強かつたようであつて、北洋鮭鱈漁場でも前年より一二度以上高温とされ全体に豊漁で特に紅ザケのすばらしい豊漁は周知の通りであり、北洋捕鯨、カニ漁も好漁、シケ少くエサも豊富であるといふのは東北海区との対照的な差を示す。これは過去の実例をみてもほとんど常に現われる現象で、東北日本沿岸寒流旺盛南下年には逆に沖で北洋アリューシャン、カムチャツカ、ベーリング海へ指向する暖流がつよい相関現象をみ、暖流に対する寒流の反流的な消長を示す性質を示している。これを早くから予知する事は秋冬春の海況気象をしらべる

と可能である。

北洋捕鯨と日本近海捕鯨の豊凶の相関もあると思われる。北洋に來遊するマッコウ鯨なり、イワシ鯨なり、シロナガス鯨なりが東北海区を通る鯨と関連していることは確かであるが、鯨道を明かにし、上記のような海況との関連を求めることは重要な研究問題であり、沖合探鯨を大型飛行機で行い又は鯨に音波発振器(電波発振器)付の標識もりをうちこんでおいかけるのも一方法であらう。

(4) 東北海区では本年五月上旬は鹿島灘沖から常盤沖にかけて小名浜、請戸沖を中心に黒潮がはやくて五月下旬のクロマダロの旋網船が六組も網切れ流失、三陸

沿岸にも五月半、六月半に暖水が沖より入りこみサバ、メジの漁があり、金華山南東六〇〜百マイル沖で五月二十日、六月十日イワシ鯨、マッコウ鯨の大漁がついた。一方クロマダロは昨年から三陸沿海に本格的豊漁でにぎわつてはいるが、本年は津軽暖流の弱いこと、沿岸寒流が金華山の北まで春に南下して暖流の北上をおさえ、岩手県釜石沖合から金華山沖にかけて四月に入り寒流先端に「厄水」を発生し、距岸五〜五〇マイルに亘り水温一〜五度、濃褐色ケイ藻繁殖による変色水を見た。本年秋は昭和三十年の大漁におとらぬサンマ大漁年だが、鯨漁場はサンマ漁場の一週間位あとによくみえたという。

五月〜八月仙台湾に暖流分派が入りこんで久しぶり(四半ぶり)の牡鹿方面定置網豊漁(イワシ、サバ、ブリ等)で赤字を一掃、イワシ、サバ、サンマ、イカ等の好餌をめざして索餌洄遊北上をつづける大マダロ、メジ、キハダ、中マダロの魚群団が六、七月金華山南東沖六〇マイルあたりのいつもの潮境にできた袋状の暖水塊で集中濃密漁場を示して塩釜市場に水揚げの盛況を示した。しかし九〜十一月は前年とらつてかわつた不漁に終つた。鯨も鯨種によるがサンマ、イカ、イワシ、アミなど共通したエサにつくので注目され、イワシのようなエサの多い年にはミンク等が大漁といわれる。五島荒川沖東シナ海の漁場も本年は暖流弱く低緯で潮境発達せず、エサ少く、鯨はやせており、賢くて集まらず、漁はよくないことである。このように鯨のエサの分布やそれに関連をもつ他魚の漁場の分布と海況、鯨漁場の関係は興味ある且つ重要な研究問題といふべきである。鯨付カツオ群の情報など距岸五百マイル以内で特に重要である。「トタンイワシ」(トタン色をしたイワシ鯨)が来るというナガス鯨が来るというような経験的事実は何かエサ、海況の継起関係を示唆している。

近岸クロマダロ、サンマ漁場と鯨漁場、イルカ群等はよく合致しており、八月金石東線にクロマダロ群北上漁場に鯨が一しよに現われ、同沖南東線にクロマダロ、カツオのかたまつた漁場があり潮境、エサの関係、適温、適水の組合せでいろいろな様相を示しているようである。

1957